

⑦ 黒耀社第一回展覧会

校友会文学部関係者は卒業後黒耀社を結成し、大正四年九月二十五日から十日間、上野松坂屋で第一回展を開催。新鮮な作風が注目され、都下の各新聞にとり上げられた。それらによると、凡そ次のような人々が油絵、水彩、日本画、彫刻、版画、蒔絵等七十余点を出品した。

伊藤順三、大野隆徳、小松喜代子、広川松五郎、水谷鉄也、田辺孝次、高村豊周、原三郎、川路誠（柳虹）、西村青帰、大國貞三、小倉淳、柳俊夫、山本豊、前田公篤、水島爾保布、伊藤喬、堀義二、田辺至

この展覧会については校友会月報第十卷第八号の文学部報告のなかに大盛況であったという短い記事が載っているのみで、特に大きくとり上げた新聞もなかったようであるが、高村豊周は『自画像』のなかでかなり詳しく述べている。それによると同会は文芸部〔学〕のなかの鴨脚会〔部〕（川路柳虹、田辺孝次、原三郎、小倉淳、山本純民、広川松五郎、高村豊周）が発展してできた会で、松坂屋の美術部長久保田金僊の好意で松坂屋を会場に借りて第一回展を開いた。その目録（表紙の写真が掲載されている）は北原白秋の詩集『思ひ出』に似せて広川松五郎がデザインし、扉に柳虹が詩を書いた。出品作は七十五点で小品が多く、豊周の六代目菊五郎の像が唯一の大作であったが、皆が楽しんで作ったような伸び伸びした作品であったため、予想外の反響があり、黒田清輝と岩村透も見に来た。特に岩村は小倉淳の葡萄唐草の更紗や豊周の羊歯の模様の壺の新鮮さを誉め、会を

激励してくれた。作品もよく売れ、松坂屋も作品を引き取ってくれたりしたので、展覧会は成功を収めた。これに意を強くした豊周らは翌大正五年十一月五日から十一日まで京橋玉木美術店楼上で第二回展を開いた。豊周はこれについて、

メンバーは更に増え、今の山口蓬春がまだ山口三郎という本名で油絵を五点出したし、郷倉千靱も白雅といっている時代で、日本画を二点、油絵を一点出品した。油絵では大野隆徳と神津港人が三点ずつ、今日なお高く評価されている異色作家万鉄五郎が十三点も出品している。広川松五郎、川路柳虹は二人とも油絵を出しているのは珍しい。私は鍔金を四点、彫刻を二点出品し、会員の出品は全部で百三点の多数に上った。

と記している。今回の展覧会については各紙が同時期開催の草土社展、日本版画倶楽部第一回展などと並べてこれを大きくとり上げた。十一月六日付『万朝報』、同七日付『国民新聞』、同八日付『中央新聞』、同九日付『東京朝日新聞』の記事を総合すれば、出品概況は凡そ次のとおりであったことがわかる。

水谷鉄也 彫刻「或老人の像」、リビエール原作「黎明」模刻、
薄肉「S氏肖像」
大國貞三 彫刻「男の顔」
大野隆徳 油画「山頂の松樹」外小品

萬鉄五郎 同「男の顔」「風景」外小品
神津港人 同小品

『国民新聞』に社外より助勢の作とある。

小松喜代子 水彩「春」「傘を持てる少女」「海辺の町」「静け

き日」

川路柳虹 油画「老爺」「休憩」「緑衣の女」

広川松五郎 同「海の男」「自画像」「おんな」

山口三郎 同「海荒るる日」「砂丘の村」

前田公篤 同

伊藤順三 日本画大作「浅草観音堂」「帰りゆく唄ひ女」外に水

彩画三点

郷倉千鞆 日本画「神様」

広島晃甫 同「雑草園」

塚越東七 彫刻「顔」

幸崎伊次郎 同「W氏像」

井上(直伍カ) 同「姉の顔」

伊藤喬 同「左団次」

高村豊周 西洋名家原型による鑄造「ヴェートローヴェンの顔」鑄

造「円筒花瓶」「睡蓮灰皿」

原三郎 蒔絵菓子盆「ねむの花」

小倉淳 更紗卓袱

堀(義二カ) 雁の水指

柳俊夫 釣燈籠

高村豊周によると黒耀社第二回展は成功裡に終わったが、お祭り気

分的のものになったことを反省して解散し、工芸方面のメンバーのみで柱人社を作ったという。

⑧ 設置記念日における河口慧海の講演

大正四年十月四日の本校設置記念日には河口慧海の「西蔵の美術に就て」と題する講演があった。講演筆記は『東京美術学校校友会月報』第十四卷第九号に掲載されている。慧海の本校における講演は明治三十六年に次いで今回が二度目である。

⑨ 海野勝珉の卒去

四月より療養中だった本校教授海野勝珉は大正四年十月八日午前一時頃、本所区番場町三八の自邸にて卒去した。この十月四日には、本人は出席できなかったが、勝珉の美校二十五年動統祝賀会が開催されたばかりであった。十月九日付の各新聞には写真入りで勝珉の逝去が大きく報道されている。葬儀は、十日午後二時染井泰宗寺齋場にて執行され、同染井墓地に葬られた。『東京美術学校校友会月報』第十四卷第六号に以下の訃音が掲載されている。

海野教授の卒去 (晁江記)

明治二十三年二月以来本校金工科に教鞭を執りて熱心後進を薫陶せられ、社會にありては、金工界の鉅匠として、人咸な其作の傑出せるを慕ひたる、本校教授帝室技藝員海野勝珉先生は、本年十一月八日病のために俄に卒去せられたり。我校のため美術界のため、洵に痛惜に堪へざるなり。先生の病に罹りたるは本年四月